

油彩画の魅惑—17～19 世紀 日本における聖画の制作と風景の再現

日本と西洋の出会いは、キリスト教美術との出会いでもあった。イエズス会は聖画を描く絵師たちを養成したが、それは音楽、ラテン語を学習させる教育機関で行われた。ここで試みられた折衷的な油彩技法は、禁教によって衰滅するが、18 世紀後期になって、オランダ絵画の受容によって、西洋風俗の描写、写實的風景の再現が自発的に行われる。そのほとんどは油彩画を模した技法であったが、自然主義ヴィジョンの独習は、日本人の視覚の近代を準備し、特異な絵画世界を創り上げたのである。

The fascination of oil painting: Sacred paintings during the 17th and 19th centuries in Japan and the representation of landscapes

The encounter of Japan with the West resulted in exposure to Christian art. Jesuit-trained artisans created sacred paintings at educational institutions where people learned music and Latin. The eclectic type of oil painting that was practiced there fell out of use because of the persecution of Christians in Japan. At the end of the 18th century, Japanese artists were inspired to learn Dutch painting styles that were then imported, and spontaneously tried to depict Western genres and realistic landscapes. Although they tried to imitate the effects of oil painting techniques, we may safely say that their self-learning of the naturalistic visions paved the way for modern Japanese visions that lead to a unique world of narratives.

岡泰正（神戸市立博物館展示企画担当部長・学芸員）

Yasumasa Oka

1954 年舞鶴市に生まれ神戸で育つ。関西大学卒業、同大学院修士課程修了。1982 年より神戸市立博物館学芸員として就任。「オルセー美術館展 19 世紀芸術家たちの楽園」（2006）、「南蛮美術の光と影」（2012）、「マウリッツハイス美術館展」（2012）など数々の展覧会の企画に関わる。2011 年、博士学位取得（関西大学）。専門は日欧文化交流史、日本近世絵画史、工芸史。第 1 回鹿島美術財団賞受賞。

主著： 『めがね絵新考』（筑摩書房、1992）、『司馬江漢』（新潮社、1998）、『身近図像学入門』（朝日新聞社、2000）、『日欧美術交流史論』（中央公論美術出版、2013）ほか。